

もう一つの「名利」：「奉公人」の「立身」： 『葉隠』の葛藤

高野，信治
九州大学大学院比較社会文化研究院：教授

<https://doi.org/10.15017/1546850>

出版情報：九州文化史研究所紀要. 54, pp.27-58, 2011-03-30. Manuscript Library, Historical Records Section, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



もう一つの「名利」

——「奉公人」の「立身」…『葉隠』の葛藤——

高 野 信 治

はじめに

近世の武士、すなわち戦闘者・戦士としての属性を持ちつつも、泰平・治世に生きた彼らは、いかなる出世、昇進志向を持ったのか。これが本稿の問題意識である。戦功をあげ主君から褒美・出世などの荣誉を与えられる機会が事実上なくなり、また身分制社会が成熟するなかで厳しい格式が武家社会をも覆う時代環境において、近世の武士たちにとり出世・昇進はいかなる意味を有したのか。格（家格）と高（禄高）・役（役職）の相即が原則とされ、その格も戦功を基準に決定される傾向が強いとみなされるためか、近世武士の出世・昇進をテーマにした研究は立ち後れているのが現状だろう。^{〔1〕}

しかし、近世武士の出世・昇進の検討は、平和時の武士の精神性の分析という観点から少なくとも意味は持とう。いささか大げさな言い方をすれば、彼らの生き甲斐を出世・昇進という発想で捉えることもできよう。戦士としての属性を自分の名誉が侵害された際などを除いては、合戦・戦争がみられないなかで公的に封印させられた武士は、組織集団（いわゆる「御家」）。大名家の家臣のみならず、徳川家に属する旗本・御家人なども例外ではない）に属

し、その「御家」のもとで勤める役人となった。組織に属することで社会性が内在される彼らは「武士」一般ではなく「武家」として区別される。⁽³⁾このように平和時の組織に属することで社会性を持ち勤役を果たす彼らは、「武家」としての役を遂行するなかで、家格や役職、また禄高の増加など、出世・昇進を志すのはある意味自然なのはなからうか。またそれは近代における自身の立場や公共性（国家など）に資する志向性を有する立身・出世意識⁽⁴⁾の問題にもリンクしよう。

私は以上のような見通しのもとに、福岡藩黒田家の家臣を対象に、家格の基本である戦功意識も含め若干考察してきた。⁽⁵⁾福岡藩の分析を通じて、本稿で留意したいのは、役方勤務の家臣に求められる姿勢である。初代福岡藩主黒田長政は、侍の義理を知らず、奉公するのに陰日なたの態度をとり、偽りをもって自分の行為を飾り立て、主君を欺き、自分だけが立身しようという心根を持つものがあれば報告するように、元和三年目付へ指示したが、このような考え方は継承される。享保一四年、明石四郎兵衛なる人物が財用方を御免（解職）となった時、偽飾をもって、自分の身の功名だけを考えた不実を行ったとされた。そして、「仁義忠信」の道德心を無くし、主君や国政に役立つ気持ちがなく、自分の功名をあげようとしたのは、才能があるだけに余計に罪が重いと断じられる。家臣の役勤に際し、家臣として心懸けねばならない立場をわきまえず、功名に執着する不道德者としての眼差しが看取される。意欲や才能は家臣としての道德性が備わっていないければむしろ有害という見方である。したがって、立身出世・加禄（禄の加増）には、精勤さとともに格別の德行、道德的な行いが必要とも考えられていたのである。

このような福岡藩黒田家の事例よりみれば、私心からの出世・昇進は不道德なものとして誠められていたことが理解される。ここには私心からの出世・昇進が多くみられたのが想定されると同時に、そのような思いの合理化が一方では必要とされていた可能性も窺える。本稿では、かかる観点より、佐賀藩鍋島家の家臣・山本常朝⁽⁶⁾が口述した『葉隠』を中心に、彼の他の著作も参照しながら、近世武士の出世・立身をめぐる認識を検討し、あわせて近世

武士の精神性が語られるとされる『葉隠』の性格の一端を考察したい。

一、山本常朝と『葉隠』

『葉隠』は近世武士の思想書、就中、武士道書の代表的な著作と目され、思想史分野を中心に多くの先学が論じている。戦前には没我的・情義的な主君への奉公観や死生観が注目され、いわゆる軍国主義の精神性構築に資する書物として喧伝されたが、戦後は没我的性格と主体的性格を併有する奉公観が提示され、前者に近世的な主従意識、後者に中世・戦国的な主従意識が反映しているとみなされたり、武士の役割を三民（農工商）への教化と捉える士道論に対し、戦闘者としての意識を強く持つ武士道論との見方、また戦国期の武士道論が「奉公人」意識を軸に再構築されたものなど、様々な評価が展開されている。⁽⁸⁾

但し、『葉隠』が如何なる背景で成立したのかについて、十分な考察がなされてきたとは言いがたい。例えば、『葉隠』は原本が確認されていないが、写本類は『葉隠聞書』『葉隠集』『聞書』等、その呼称は一定しない。ただし、『聞書』という表題があることから、佐賀藩で確認されるその他の「聞書」類との関連が想定され、現に多くの箇条で他の「聞書」類からの引用がみられるばかりか、『葉隠』巻三には「此一巻は、直茂公御咄。『茂宅聞書』『柴田聞書』『御代々御咄聞書』に無之事を書付候也」⁽¹⁰⁾とさえある。『葉隠』とこのような「聞書」類との関係性は考察されねばならないが、本稿はその作業の不十分さの提言とその実践が目的ではなく、『葉隠』が佐賀藩で作成された様々な「聞書」類などに基づく歴史書としての性格を持つ点を指摘したい。『葉隠』は武士の思想書（武士道書）とともに佐賀藩鍋島家成立に関し「聞書」類などを基に記す歴史書としての性格を有するのである。そこには佐賀藩が戦国大名竜造寺氏からその家臣筋にあたる鍋島氏へ領主交替し成立する特殊な事情があり、口述者・常朝およ

びその聞き役とされる田代陣基⁽¹²⁾は、それぞれ退隠、遠慮の身でありながら、かかるテーマを主要な柱として記述内容を収集、編纂したのである。いわばうしろめたい歴史の弁明ないし合理化の意識が存在する⁽¹³⁾。

また、『葉隠』は全一巻からなるが、巻一―二と巻三―一一の構成・内容が異なる点も重要だろう。前者は写本によっては「夜陰の閑談」とも題される序論的内容がまず据えられ、その後に「教訓」と付記される巻一―二が配される。そして序論冒頭部に「宝永七年三月五日 初会」、巻二の最後に「翌朝」として常朝と陣基の歌二種がそれぞれに記され、巻一―二の内容が一夜語りのまとまった形式を採っている。内容は具体的事例を記すものの全体的に抽象度が高く、『聞書』が思想書・倫理書と捉えられる所以でもある。注目したいのは巻二の最終条目にあたる一四〇・一四一⁽¹⁴⁾が、常朝の養子・吉三郎へ宝永五年に与えた『愚見集』⁽¹⁵⁾の内容を基にしており、しかも「奉公人の至極は、家老の座に直り、御異見申上ことに候（略）名利の真中か、地獄の真中に駆入ても、主君の御用に可立と也」（二二の一四〇）、「家老に成るが奉公の至極也（略）二六時中修行候て、骨を折、紅涙迄にはなく候へ共、黄色などの涙は出申程に候」（二二の一四一）とあるように、「御家」という武士集団の組織に属する「武家」、これを常朝は「奉公人」⁽¹⁷⁾と称するが、その奉公人としての「至極」、つまり極まったあり方が家老になることであり、常朝自身が「名利」のなかであるいは「地獄」に入る思いで、涙を出しながら「工夫」したと述懐する。常朝の実感としてはこのような苦労にも関わらず報われなかったという思いであろうが、それを、常朝はやはり合理化していると考えられる。いわば挫折の昇華とでもいえるようか。巻二の最末尾には「誠に身の上咄、高慢の様に候へども奥底なく、不思議の因縁にて、出家の閑談、無他事有体に咄申候」（二二の一四一）とあるのは、あるいは序論冒頭の「夜陰の閑談」に照応するもので、結局、巻一―二の内容は、「奉公人」としては十分に思いを遂げられなかった常朝の葛藤から、「奉公人」のあり方が紡ぎ出されたもの、といえよう。

これに対し巻三―一一は、先述した佐賀藩の歴史の内容を、各藩主やその家族（巻三は「藩祖」とされる鍋島直

茂、卷四は初代藩主勝茂とその子忠直、卷五は二代藩主光茂、三代藩主綱茂、支藩蓮池藩二代鍋島直之や「御姫様方」、広く歴史全般（卷六は「御国古来の事」、「奉公人」の内容に関わる家臣のエピソード（卷七・九は「武勇・奉公方、御国諸士の褒貶」）などに整理して編纂される。⁽¹⁸⁾そこでは竜造寺氏に替わって政権の座についた直茂・勝茂という統治にも長けた理想的な武将像、これに対する竜造寺氏やそれ以後の藩主への相対的な見方や家老や家臣の現実と直茂・勝茂代の家臣のあり方が対比的に描かれる。

このように、『聞書』全一一巻は内容的に大きく二つの部分からなるが（もちろん内容的には卷一・二の教訓が卷三・一一に具体例として記されるという側面もある）、いずれも、常朝が意識した葛藤、すなわち佐賀藩鍋島家成立の歴史へのうしろめたさ、および藩主や家臣の現実やとくに「奉公人」の現代社会（つまり近世期）⁽¹⁹⁾での理想像と自己をめぐる挫折感、そのようなものが『葉隠』成立の背景、このように私は考えている。⁽²⁰⁾

以下、『葉隠』を中心に、常朝の他の著作も参照しながら、「立身」意識、すなわち出世・昇進の認識を探りたい。指摘してきたように、『葉隠』は奉公の至極である家老に至らなかつた葛藤の所産としての常朝による「奉公人」論の性格を持つが、それが「名利の真中か、地獄の真中」に駆け入っても主君の御用に立つこと、という表現は興味深い。「名利」とは黒田家の事例で、道徳性の立場から出世の動機としては否定されていた私心につながるものであるが、『葉隠』は「名利」で何を志すのか。また出世をめぐる「地獄」はどのような心象風景か。そこには常朝の出世をめぐる葛藤の合理化、そのようなものが看取される。ただし、

偏に日來の心懸なく、武士とは何としたるものやら、夢にも不存、うか／＼と日を暮し罰と云物成べし（略）
とかく兼て吟味可仕置こと余多可有也（二の四九）

人來テ如何是奉公人ノ大意ト問、又如何是武士ノ大意ト問たる時キ、分別なし二端的返答を抜合する人ハ多クハ有間敷⁽²¹⁾

と、日頃、自らの本質・立場を問わない「武士」「奉公人」に対して、常朝は単なる上昇志向を喚起するのではなかった。

二、「奉公人」像

それは常朝の「奉公人」像に起因する。そもそも奉公人は「私」に執着せず、主君へは「陰の奉公」するような存在であり、かかる本質を持つ奉公人だからこそ、「御褒美」、出世・昇進は期待できないことになる。

常朝は、家督を譲った養子・吉三郎へ宝永五年に与えた『愚見集』でこのようにいう。奉公人は忠孝を尽くすために生まれてきたという「真実」を知るべきである。忠孝は別ものではなく、主君に忠節を尽くすのが親への孝行（つまり子・吉三郎の父・常朝への孝行）であり、したがって「忠一ツ二極りたり」なのである。「知行」拝領者が忠節を尽くさなければ、どのようにして主君の「御恩」に報い得るのか。「奉公」とは公に奉る、と書くのであり、今すぐ身命を主君に奉れば、「はや私と云物ハ一物もなく成」のである。いわば主君（公）へ自らを「奉」じて「私」を去るのが「奉公人」である。したがって、主君からの見返りが無い時でも少しも恨まず、ますます忠節を尽くさねばならない。そもそも人の行為は、自分の行った事と知られないようにすべきで、「主君へは陰の奉公が真」である（一一の一三九）。これは、「御情」なく「御無理千万」の奉公が真の奉公、という常朝の祖父・中野清明⁽²⁾の教訓と重なり（九の二四）、吉三郎へも伝えられた（集八五七）。主君の御情・御恩を期待しない陰の奉公は、中野・山本家のいわば家訓なのだ。

しかし、実際には、様々な奉公人がいた。常朝は吉三郎に対し、自分（「我身」）を忘れて主君（「主人」）に尽くす者、主君の為を第一にしつつ自分のことも考える者、主君も自分も同様に考える者、自分を第一に考えつつ主君

のことも考える者、そして、自分のことのみを考え主君の爲を思わない者、の五タイプに奉公人を区別し、「先凡此次第一」つまり奉公人の優劣はこの順序とし、これを基準に自分（吉三郎）についても考えるように論ず（集八五六）。現実の奉公人は「今時ノ奉公人を見るニ仕合ノ能時ハす、ミ、仕合ノ悪敷時ハ草臥て述懐する人多し」と常朝はみており、自分の境遇・待遇がよい時には働きもするが、悪い時は不満を述べ、「す、ミ退キ有ハ」と自ら退任する態度は、「皆私」つまり私心からくると、常朝は子・吉三郎に教える（集八五七）。自分の境遇・待遇を優先的に考える、換言すれば主君からの見返り（御恩）を期待する、常朝の表現では「凡」の奉公人が多いのである。

もつともこれは当然ともいえよう。主従関係は御恩と奉公から成り立っており、「奉公」のみで関係が維持されるわけではなく、常朝は吉三郎に対し主君の「御恩」の重さの自覚も促す。ただしそれは、「奉公人ノ打留メ」つまり最終的なあり方が牢人（浪人）・切腹というのを示すためで、「主人ノ御恩ハ日ニ増重リ報シ奉ル事ハ不足なれハ、何としても荷負きらす、御罰を蒙るより外なし」と、奉公が御恩に迫いつかず、このため両者のバランスが崩れ、浪人・切腹する恐れがいずれの奉公人にもあるとみ、そのような恐れを覚悟し潔く牢人・切腹に従うことで、却ってそれが回避されるという認識からのものである（集八五九）。牢人・切腹の覚悟は、死と隣り合わせという戦闘者としての武士が持つ死生観とも関連しようが、常朝は自分が属する中野一門に切腹者が出たことの合理化の意識が強いとみられる。⁽²³⁾ かかる問題は暫くおき、ここでは、主君の御情・御恩を期待しない陰の奉公を奉公人の理想のあり方とみる常朝ではあったが、主従関係を成り立たせる御恩にも、奉公のあり方との関係で独自の思いを持っていたことを確認しておきたい。

それでは御恩の具体的なあり方でもある立身・出世に関して常朝はどのように考えていたのか。関心を抱いているのは間違いないが、それはあくまで彼が理想化する「奉公人」の奉公のあり方と関連してであろう。次の発言をみよう。

若年の頃より見懸りの拙者に候えば、御用に立事もなく、出頭人などを見、浦山敷候え共、殿様を大切に思ふ事、我に続き申間敷候存出し、是一つにて心を慰め、小身無足をも打忘れ、勤申候、御前御逝去の時、我等一人にて御外間とりたり（二の一九四）

手間を厭わずに整理すればこうなろう。若い頃より見掛け通りの自分で主君へ御用に立つこともなく、「出頭人」を羨望してきたが、主君を大切に思う気持ちは自分に続く者はいさせない（誰にも負けない）と考えるようになり、自分が小身で小禄なものも忘れ精勤し、主君（鍋島光茂）逝去に際しては、（光茂自身が追腹、いわゆる殉死を禁じていたので）出家し、主君の名誉を守った。ここで問題は常朝は出頭人をなぜ羨望したのかである。小身・小禄の身ゆえなのだが、それは主君の「御用」に立つのに、出頭人の立場が適しているという考えからであろう。したがって小身・小禄の自分が奉公人としての最善の「御用」に立つためには出頭人に立身するのが必要になる。そのような解釈ができるだろう。実際、常朝が自ら記した年譜には加増、拝領の記事が散見し、彼自身が立身・出世への意思を持ち合わせていたのが読み取れる。⁽²⁾

したがって、常朝からみれば「利発」ゆえに「そろ／＼病者を作り大役などあたらぬ様にして次第二子共二ゆつ」るとき自分の立場を最優先して大役に就かない「小欲にして望なき人」は、「物ノほしき二情（精）」を出し勤廻ル」ような「大欲人」同様に受け入れがたいのである。なぜなら、「畢竟身上崩ス事ノおそろしき二引取たかる所存」と、常朝が武士として許されまじきと考える、自分かわいさゆえの臆病さ、を感じ取っているからとみることもできよう（集八五七）。目先が利くからこそ保身のために失敗を予見し、立身の欲求・望みを持ち得ない臆病な武士（奉公人）に、主君への〈真の奉公〉はできないのである。

しかし、立身は降格・断絶と裏腹の関係にある。それは常朝がいう奉公人の最終的なあり方、切腹・牢人にもつながり、むしろその自覚が積極的な奉公の実践につながる、と彼は考えていた。その意味で常朝が立身への過度の

執着を忌避したのは、次のようなエピソードを『葉隠』が収載することからも知られよう。例えば能役者の話題である。能が達者な源七は光茂代に召し出され、侍に取り立てられた。しかし、日々御前に罷り出て氣遣いがあつた。それをみていたある家臣（三谷千左衛門）は、「一度立身被仰付候へば、生來の本望は早達候、此上にて牢人・切腹被仰付候ても少も残念の所は有間敷候」といったという。これについて『葉隠』は「此一言にて源七は胸すはり、心安く成候と申候由也」と付記する（八の三二）。一度の立身さえ実現すればその後の牢人・切腹に残念がる必要はなく、却つてそのような自覚が自分を安心させ、よりよい奉公につながるというのである。座頭の谷落ちの話題も、執着の相対化を仄めかしている。すなわち、谷へ落ちないかと心配するから落ち着かないのであり、落ちてしまえば何の氣遣いもないという（一〇の一二五）。

立身・出世そのものが目的ではなく、降格・断絶も覚悟した奉公、これが、「奉公人」の「立身」をめぐる常朝のイメージだろう。

三、「立身」の条件

奉公人が最善の奉公をするためには出頭人・家老などに就く、このように考える小身・小祿の常朝にとり、立身・出世は彼の人生では小さくない問題であつた。それでは、立身・出世には何が必要と考えていたのであろうか。いわば立身の条件である。それを一言すれば「人」との関係といえよう。ただしその場合の人とは主君ではなく、周りの人、同じ「御家」に属する人々であり、また同じ人であるというのはその人に引け目を感じる必要がないという主張でもある。さらに主君から直接認められることは弊害とさえ考えられていた。

このような「人」との関係を整理すると、いわば競争と協調という、一見、矛盾するような内容がみえてくるが、

むしろそれらは相関的な位置にあったと解される。以下、具体的にみてみよう。

(1) 競争的側面

常朝は吉三郎へ、若い時からの奉公を論じた。人生は五、六十年の間のことであり、ましてや長生きできるか否かはわからず、奉公を延び延びにしている間は間に合わない。したがって今日より奉公に励むと思ひ精進するのが、「忠臣ノ地盤」という（集八五三）。人の寿命はよくわからないからぐずぐずしていれば奉公できないことがあるので若い時から励め、というような子への申し渡しは、ひとかどの人物にも負けない、いわば即座の立身とでもいえる考え方につながる。

人は立あがる所がなければ物にならず、人より頭をふまれ、くさくとして一生を果すは口惜き事也、誠に夢の間成に、はつきりとして死度事ぞかし、爰に眼の付もの稀也、在家も出家も、当時何某く家老・年寄役に御用に立、何和尚く一派を持て居るを見て「かれも人也、鬼神にてはなし、少も可劣謂なし、若も誰々に乗越ずんば、腹搔破て死べし」とつゝ立あがれば、即座に上は手成事也、功を積てからと云はまだるし、一念発起すれば、即立あがる也（一一の一四一）

ここには、立身を志す激しい競争心が明確に記される。人に頭を踏まれ一生を終える口惜しさ、家老・年寄役や一派を率いる僧侶さえも、けして鬼神ではなく人であり、同じ人であるからには自分が劣る所以はなく、彼らを乗り越えられなければ腹を掻ききつて死ぬ、というような覚悟を以て思い立てば、即座に立身にいたる。功績を積んでからというのではまどろこしいのであり、一念発起すれば即座に行動すべきとの主張である。「名人も人也、我も人也、何しに劣るべきと思ひて一度打向ば、最早其道に入たるなり、十有五にして学に志す処が、即聖人也」と、誰でも「人」として同じであり、道に早く志すのがよいという石田一鼎⁽¹⁵⁾の話（一の一六）は、上記のような常朝

の主張に影響を与えていよう。

しかし、常朝において、「人」との競争心は、同じ立場ゆえに負けないという見方とともに、武勇・武篇という武士・戦闘者独特の心性とも無縁ではないと思われる。その武士としての個性は戦場でこそ顕著に現れる。

戦場にて「人に先を越れじ」とおもひ、「敵陣を打破り度」とのみ心懸る時、人遅れず、心気猛なり、武勇を顯すぞかし、古老申伝候也（一の二六二）

戦場で人（つまり味方）に先を越されなれないと思い、敵を打ち破ると心懸ける時に、「人遅れず」心気が猛々しく「武勇」になるという。「人」に遅れをとらないという場合の人は敵ばかりでなく味方も指す。『葉隠』の序文（「夜陰の閑談」）の最後には、「我等が一流の誓願」として「四誓願」を挙げる。その第一条が「於武道おくれ取中間敷事」であることは留意しておきたい。「古老申伝」とあるものの「武勇」「武道」に遅れを取らないのは、「奉公人」としての近世武士にとつても重い価値を持つ。なぜなら日常のなかに活かされねばならないものだからである。

中道は物の至極なれども、武篇は平生にも人に乗越したる者にてなくば、成まじく候（略）軍陣にて武功の人に乗越べきと心がけ、強敵を可討取と昼夜望みをかくれば、心猛く、草臥もなく、武勇も顯すよし、老士の物語也、平生にも此心得有べき也（一の八三）

「武篇」「武勇」は、「平生」でも人に遅れを取らずむしろ乗り越えるものとして意味を持つ。

それはなぜであろうか。敵を打ち破り、味方にも先を越されない戦場での「武勇」「武篇」の心組みが、近世武士・「奉公人」が生きる泰平な日常のなかにどうして必要なのだろうか。

一分の武篇をしかと我心に極置、無疑様に覚悟すれば、自然の時一番に撰出さる、事必定也、是は折節の仕形・物言にて顯る、もの也（一の二一八）

一門・同組に、介錯・取者など、武士道に懸りたる事有時、我に統者なき様に平生覚悟して置ば、自然の時、

もう一つの「名利」

人の目にもかゝるもの也、常に武勇の人に乗越んと心懸、「何某に劣るまじき」と思ひて、勇氣を可修也（一の六一）

これらによれば、それは「人」、つまり「御家」に属する人々に認められ、「介錯・取者」なども含む「自然の時」、すなわちいざという時に選任される機会を得るためであり、かかる心組み・覚悟のあり方は言動にも現れるとする。「武篇」「武勇」の覚悟は自ら属するいわば味方の人々に認めてもらう上で重要なのであり、それは日頃の言動への留意にもなる。味方に認めてもらう、先を越されないということについては、近世初期の鍋島家臣（成富兵庫茂安）の言として、「勝といふは、味方に勝事也、味方に勝といふは、我に勝事也、我に勝といふは、氣を以、体に勝こと也、兼て味方数万の士に、我につゞく者なきやうに、我身心をなして置ねば成らぬ也」（七の一）の記事を載せる。勝利（勝）とは敵というよりも「味方」に勝つことである。さらにそれは「我」（自分）に勝つことであり、その際、「体」（身体）の限界を「氣」で越えねばならない。結局、大勢の味方に勝つということは自分の「心身」、とくに「氣」「心」が大事とする。「氣」「心」の持ちようが味方のなかから抜きんでて、認知され、役への選任の機会を作ることになる、『葉隠』からこのように読み取れよう。

かかる強い「氣」「心」を持ち、味方つまり「御家」・組織の人々から抜きんでるためには、自分の弱みを見せてはいけない。

武士は万事に心をつけ、少にても後（おく）れに成べき事を嫌ふべき也、就中、物言に不吟味なれば、「我は臆病也」、「其時は逃可申」、「おそろしや」、「痛い」など、いふ事有、されにも、戯にも、寝言にも、たわ言にも、言まじき詞也、心有者の聞ては心の奥おしはかるもの也、兼て吟味して可置事也（一の一一七）

武士は遅れを取ってはならず、とくにどのような場合にも自分の弱さを表現するようなことは厳禁で、自らの「心の奥」を他人に推量されるのは避けなければならないのである。それは「武士は、かりにも弱氣の事をいふまじ、

するまじと、兼て可心懸事也、かりそめの事にて、心の奥見ゆるもの也」(二の一四二)と、「武士」であれば、些細な「弱氣」の言動からでも「心の奥」をみられるものであって、厳に慎まなければならない。

しかし、自らの弱みの自覚は否定されるべきではない。自分の弱点の自覚はより高い次元の自分を求めることであり、むしろ必要なのである。ある剣術者は、「其道に深く入れば、終に果なき事を見付るゆへ、是迄と思ふ事不成、吾に不足有事を實に知て、一生成就の念無之、自慢の念もなく、卑下の心も無之して果す也」(一の四五)といったという。自分の「不足」の自覚が、不断的努力を生み慢心を抱かず自らを卑下する思いもなくなるという。

以上のように、常朝は、人に勝つということは味方そして自分に勝つことで、そこには強い気心が必要と考えたと同時に、一方では自分の心を知られないために弱みを他人に悟られてはならないが、その弱みを自覚することが自分を完成させる上で重要とも考えていたといえよう。自分に勝つことと自分の弱みを知ることが、必ずしも矛盾しない。しかもそれは閉塞的、孤立的な心意ではなく、「人」(他人。敵・味方)が意識されているのである。

「武篇」「高慢」で「吾は日本無双の勇士」という自覚と「念々に非を知て、一生不打置」「吾道を成就」という志(一の四七)は、「人」との関係での両立が求められていたといえよう。他を打ち負かすだけの競争での立身、これは十全ではないのである。

(2) 協調的側面

ここに、他者との協調ないし他者の支持という側面が考慮されてくる。

『葉隠』は、人との競争が必要と考えているのはこれまで述べてきた通りで、戦士としての本質を持つ近世武士・「奉公人」であればなおさらであろう。それでは、人に勝る基本をどのように考えていたのであろうか。

例えば、人の意見を鵜呑みにするなという話題がある。他人の言を鵜呑みすることなく、それとは違う「理」が

あるはずと考え、「其事の上に理を付て案じて見れば、一段立上りたる理が見ゆるもの也、ケ様に、眼を付ねば、上は手取事ならず」である。しかし「扱其座にて可言相手ならば、障らぬ様に云べし、いわれぬ相手などは、障らぬ様に取合して、心には其理を見出して置たるがよし、人に越たる理の見ゆる仕様は如斯也」とした（二の一〇二）。人に越える理を志さないといいないが、他人との関係の障害とならないように配慮すべきという。

人への配慮は登用・立身に際して留意されている。これに関する今一つの話題である。諸人が認め登用されるには、「上は手の理」を見いだすことが必要である。「誰にてもそくもやるまじき」とかからないといけないが、そのような「理」を悟っても、人の批判はさけるべきである。人の心は移り安く、その批判が「人の不信」を招いてはいけない。ただし、人を傷つけないようにと適当につきあうと、逆に不信に思われ、味方の人からも評価を得られなくなる（二の一〇二）。いわば競争に勝つ「理」で他人の不信を招いてはよくなく、とはいえ適当な言動での不信も好ましいものとはいえない。

二つの話題は、人を越える上で（つまり立身に際して）、人の眼ないし人との距離が意識されていたことが窺える。このような人との距離という観点では、慢心や自慢の心を強く否定する。その慢心・自慢とは、

武士たる者は武勇に大高慢をなし、死狂ひの覚悟が肝要也、不断の心立・物云・身の取廻し、万奇麗にと心懸嗜べし、奉公方は、其位に落着、人に能談合し、大事の事は構わぬ人に相談し、一生の仕事は人の為に成ばかりと心得、雑務方をしらぬがよし（二の四〇）

という如く単なる「武勇」に通じる「高慢」のことではない。すでに述べたように「武勇」「高慢」は常朝にとり自立した武士としての存在根拠といえるものであるが、必ずしもそれは閉鎖的ではなかったのはかかる主張からも窺える。人とのつながりを重視し、独断的な発想では必ずしもなく自身での処理不可のような問題は人との相談も想定する。否定すべきは、

奉公の志の出来ぬも自慢ゆへ也、我を能と思ひ、蟲屑の上から理を付て、わるかたまりに堅まり、一世帯構て済して居るゆへ也（略）我は是にて澄むとおもふより、心に暗く、人に問尋もせず、一生をあらぬ事して果す

（二の二一九）

といういわばひとりよがりで閉鎖的な自己認識である。自ら「理」をつけて自分を「能」と思い、人の意見も聞こうとしないような者である。そしてかかる自慢は先の武勇に根ざす「高慢」とは別の「高慢」さえ生み出す。

少し理屈などを合点したる者は、頓て高慢して「一ふり者」と云れては悦び、「我は今の世間に合ぬ生付」など、いひて、「我上あらじ」と思ふは天罰有べき也、何様の能事持たりとも、人のすかぬ者はやくに立ず、御用に立事、奉公する事にはすきて、随分へり下りたる、傍輩の下に居るを悦ぶ心入の者は、諸人嫌わぬものも也

（二の二二二）

傑出した存在という自己陶醉は、「高慢」つまりは「我上あらじ」という一種の傲慢さを生む。いくら力量や知恵があつても（「何様の能事持たりとも」）、人に受け容れられなければ役には立たない。諸人に嫌われない謙遜こそ必要という。

自己本位の智恵のみに頼らず人とつながりを持つこと、人の支持・信頼を得ることが重視されるのである。一人の智恵に頼るのではなく、「私の情識」を捨て古人の智恵や人との相談（「談合」）がなければならぬ（二の一九）。

つまり「我智恵一分の智恵ばかりにて万事を成す故、私より天道に背き、悪事を成」す。したがって「真の智恵」にかないがたい時は、智恵ある人に談合したほうがよいのである。「吾人の智恵は突立たる木」いわば孤立した存在に過ぎない（二の五）。しかも理・智恵は独断性を内在する恐れがあり、「利発を面に出す者は、諸人請合不申候」（二の二〇七）、「智恵・利発ほどきたなきものなし、先諸人不請取、帯紐解き人魂されぬもの」（二の九八）と人から嫌悪される恐れがあるとさえ言い切る。むしろ、過失を犯した者などは、それをかえって後悔して嗜むから御用

に立つので立身させるべきなのである（一の五〇）。

しかし、人から嫌悪されるにとどまらず、邪な智恵（「邪智」）を働かせ「主人をだまし込、我立身の才覚のみ致し（略）ケ様の者は、多分新参・成上りに有もの也、譜代・大身には希に有也」と、『葉隠』の認識によれば、忠節に基づかない智恵による個人主義的な立身を望むものがおり、それは「新参・成上り」に多いだろうという（二の一一六）。ここには、小身者であるが、「御被官は申に不及、町人・百姓まで、御譜代相伝の御深恩」（序文二一八頁）というごとき「譜代」意識の強い常朝の自己認識が反映されているのだろうが、

殿参りするも奉公人の疵なり、惣て、御内縁・殿臬履を持ては、口がきけぬもの也、折角、骨を折て奉公しても、「引にて仕合よき」など、後指さされ、奉公が無に成もの也、何の引もなきが、奉公は仕よきものなり

（二の九九）

と、主君の臬履、引きは「奉公人の疵」とした。そこにはやはり人の眼があつた。支持・信頼を失えば奉公が無になるからである。

ところでその奉公の最高のあり方は先述のように家老に立身してのものであり、思い立った即座の奉公を『葉隠』は主張しており、競争的意識も内在した。しかし、一方で奉公人として勤めるには自分の欠点を自覚した上での人（「御家」に属する「味方」）の支持・信頼が必要であり、それは立身にも必要であるが、主君の身臬履は人の信頼を失うので戒められているのは今みた通りである。人から受け容れられるためには時間もかかり、早い立身・出世は人の妬みもおおう。常朝自身が、邪智を働かせた自身の立身しか考えない新参・成上り者というイメージを持つ可能性も指摘した。

むしろ常朝は早急な立身には慎重であつたようだ。それは養子の吉三郎に石田一鼎の言を引用し論じた次の内容からも理解できよう。

石田一鼎ノ申され候ハ、奉公人ノ立身ノ仕様ハ半疊敷て芝居見物するかとし、其謂ハ、我より先ニ大勢見物人入こミ居ル故狂言さたかニ見へす、立て見むとすれハ諸ノ見物人ニ障故氣ノ毒がり、無理ニをし分て向へ行ンとすれハ、つふり二刀ノさやノあたりたるの、草履がさハリたるのなと、とかめられ、後ハ口論ニ成、メリ無作法者として引出され、終ニ見物もならず、是ハ無功成見物人也、又功者の見物と云ハ、前方より湯水も多クのます、小用ニ立たり又ハ婦たり、色々変あるニ付、少宛向へにしり寄／＼する内ニ、メリ正面ニにしり付切狂言ノ面白所を思ふま、見て仕廻也、奉公人も又如此し、無功者ハ急ニ向を望故爰かしこ二つかへ仕損ル也、又功者ハ其身を正敷して物を不急、心永ク氣力つよく我役を尖ニ勤て居れハ、我より上目ノ出頭人、或ハ役者、又ハ死ぬるノ、病氣ノ、牢人するノなど色々転変する内ニ、少宛上へにしり上り、しまり時節到来して、思ふ図ニいたりて奉公ノ本意を遂る物也と被申候、尤成事候（集八五五―六）

一鼎は芝居見物を引き合いにし「奉公人ノ立身ノ仕様」を説いている。大勢の観客がいるなかで無理に行こうとすれば他の観客と摩擦を起こしてしまう。上手な見物人は無理せずできること（小用を控えるため湯水を飲まないことなど）をやって機会を待つ。奉公人も同じで「無功者」は焦って仕損じるが、「功者」は急がず心氣強く時期を待ち、周囲の状況の変化（他人の病氣・牢人など）で少しづつ立身し、最後には「奉公ノ本意を遂る」という一鼎の見方に「尤成」と賛意を表している。ここには急ぎ焦った立身への自制がいわれる。

立身・加増早き時は、諸人敵に成、のうじなし、遅き時は諸人味方に成、其上の幸は慥に見ゆる也、遅速共に諸人うけがひ候時は危き事なし（一一の一四〇）

早い立身・加増は諸人の反発をかうが、遅いそれは諸人が賛同するといひ、いずれにしても人の支持が立身には重要なのである。しかも「若き内に立身して御用に立はのうぢなきもの」、つまり長続きせず、「発明の生れ付にても、器量不熟、人も請取ぬ也」と例え能力があつたとしても人の支持はえられず、「五十ばかりより、そろ／＼仕上た

るが能也、其内は諸人立身晩きと思ふ程なるがのうじ有也」と、五十歳過ぎなど遅い立身が長続きするという（一の二二六）。

立身する事は人より引立らる、者ならでは用に不立也（一の二五五）

いずれにしても、立身は人の支持を得て引き立てられないと叶わず、その環境は若い内には調いがたいとみているのである。そして、人の支持さらに推挙には奉公の覚悟、死に狂いは自分にまさるものはない、という心持ちを重視する（二の六四）。独断的な智慧ではなく死に狂う程の奉公の覚悟である。しかし、これは先述した傲慢さとは違う。独断的な傲慢は人に受け容れられない。むしろそれは先述した「地獄」に懸け入ること（二の一四〇）になるやもしれない。したがって、

諸人一和して天道に任せて居るは心安く、一和せざれば大義を調ても忠義にあらず（略）無常の世の中、今の事も知れず、人に悪敷思はれて果すは無詮事也（略）人を先に立て、争ふ心なく、礼義を乱さず、へり下りて我が為あしくとも、人の為に能やうにすれば、いづれ初参会のやうにて、中悪く成事なし（一の二六三）

人の眼を意識し、控えめにして争わず謙ることが重要なのである。死に狂いの覚悟が必要でもそれは奉公のために自分を高める心組みである。むしろ「諸人一和」という協調的側面が大事とされる。「御家を一人にて荷申志」（序文二一八頁）という信念は「奉公人」としての責任感の発露ではあったも、独善性、閉鎖的なものではない。「奉公に志有て、工夫修行など致候時、多分高上に成り、至り過、本をとなへ失ひ候」（二の一九）と、一途さがかえって過度となれば、それは奉公とはいえない。

人との競争と協調は、このように「奉公人」という点で統一的に捉えられていたであろう。したがって、

人に超越する処は、我が上を人に云せて、異見を聞ばかり也、並の人は、我一分にて済す故に、一段超たる所なし、人に談合する分が一段越たる所也（一の二二七）

人に超越し自分を高めるためには、人の意見を取り入れなければならない。自分を他人の目で客観視するためであろう。それは「高上に成り、至り過、本をとなへ失」ということの回避にもなろう。

そして、人を越えるために人とながる、という奉公人としての自分の「生」を全うするためには、「今」「当座」こそ大事である。只今の一念が大事で、急ぐことはなく、一念一念が重なって一生となる（二の一七）。勝ちを意識するのではなく、当座、その場の覚悟こそ大事（二の三六）なのだ。奉公人として急いだ立身の志はよくないが、しかし思い立てば即座に実行する、現在に全力を尽くすということであろう。

四、「奉公人」の「立身」

これまでみたような『葉隠』・山本常朝の奉公と立身の考え方は、近世の一人の武士としての葛藤と覚悟の所産であつたと思われる。戦時と平時、戦士と役人など、武士の本質と時代性のはざま、また自身の体験のなかで、それをどのように捉えようとしているのか。改めてその構図を検討しながら、奉公人としての立身に対する認識を捉えてみよう。

常朝が吉三郎に対し、奉公人の最終的なあり方（「内留メ」）が牢人・切腹の二つであり、それは主人の増加する恩に報いきれなくなるため結局は罪を蒙り、その覚悟が必要と論じていた（集八五九）のは既に述べた。この牢人をめぐっては、別の観点からも吉三郎に示している。つまり、牢人は、智恵を武器に立身するものの「我ハ能キ者と自慢」し「慢心出来、人ノ事ハ虫けらノ様ニ見なし、先上リニ奢」ので「天道より蹴たハされて牢人」する。そこで「是我科也」と自分の「非」を自覚すればよいのだが、「牢人しても我非を思ひしらす、上を恨、人を恨」ような者が多い。したがって「能キ人ノ牢人するニあらず」であるのに対し「非を知ずして自慢するハ大罪人」と牢

人を指弾する（集八五七〜八）。父・常朝として子・吉三郎に伝えたい本意は、牢人そのものが悪いのではなく、自分の「非」、欠点・弱点を自覚しようとせず、自分は正しいと独断的に「自慢」する者への批判であろう。独断的、自己閉鎖的な「自慢」と常朝が重視する自立した武士として誰にも負けないという自負・「高慢」とは相違するのである。

武勇と少人は、我は日本一と大高慢にてなければならず、道を修行する今日の事は、知非便捨にしくはなし、ケ様に二つに分て心得ねば埒明ず（二の三三）

「武勇」で若いうちは自分は「日本一」と「大高慢」でなければならぬが、「道」（奉公人としての「道」と解釈できよう）を志す者は仏教でいう「知非便捨」、つまり自分の非を知り、それを捨て去らなければならないのである。」「高慢」と「知非」の兼備が必要という。

近世の武士は、死に狂う思いで忠を尽くさねばならないという戦士の側面と同時に様々な行政に携わる役人としての側面を持つ存在として、常朝は「奉公人」を概念化した。

奉公人となるからは、御前にも、家老衆の前にも、公儀の御城にても、公方様の御前にても、さつぱりと云て済す様に、寝間の隅にて云習ひて置事也、万事如此、准（ならず）い吟味すべし、鎧を突事も、公儀を勤る事も、同前也、ケ様にせり詰て見れば、日來の油断、今日の不覚悟、皆知る、か（二の四八）

「鎧を突事」（いわば戦時の戦士）と「公儀を勤る事」（いわば平時の役人）の二つは「同前」で別物ではなく、平時の役人としても戦時の戦士の心組みが必要であり、「畳の上にて武勇の顯る、者ならでは、虎口へも撰出されず候」（二の七五）である。それは、自分の「非」を知りつつ「高慢」でなければならぬということにもつながるう。

しかし、現実社会には、自らの「非」を知りつつ勤めに「高慢」な自負・責任感を持つ「奉公人」、それも常朝

が奉公の至極と考える家老・年寄などの上層家臣に、かかる自覚を持ち言動を實踐する者はいないという実感、いわば現実に対する批判・失望があったようだ。

天下国家を治るといふは、不及事、大惣の事の様なれども、今天下の老中、御国の家老・年寄中の仕事、此庵にて咄候事より外は無之もの也、是にて成程治めてやる事也、結句あの衆は無心元事有、国学を不知、邪正の吟味せず生附の理発任にて、諸人這廻り、おぢおそれ、「御尤」とばかり申に付、自慢・私欲出来るものにて候と也（一一の一六八）

これは『葉隠』最後の条文である。「天下」（幕政）に関わる老中、「国家」（藩政）に関わる家老・年寄の役割（「仕事」）は、山本常朝が田代陣基にこれまで「此庵にて咄候事より外は無之」とする。つまり、『葉隠』の主題の一つは、常朝が奉公の至極とする老中・家老をめぐるものだったといえよう。小身者の常朝にとり立身はその道程にある。ただそれは、他者を打ち負かす独善的な立身ではなく、自分の「非」を知りつつ死に狂うような自負心（高慢）を持つ「奉公人」として現在を大事にする、そのようなものであった。しかし、家老層（「あの衆」）は、組織・藩の歴史（「国学」）を知らず、ただ自身の智慧（「理発」）のみで判断し、主君に対しては高慢な自負心を持つこともなく、ひたすら「御尤」と怖じ恐れるだけで、自己への陶醉と利益（「自慢・私欲」）のみを考える、それだけの存在になっていると、痛烈に批判し失望していた。吉三郎に対しても

畢竟主君ノ悪敷事有ハ家老・年寄其役の者不諫故なれハ、人ノなき事を歎ハさも有ヘシ（集八五七）

「主君」（藩主）の「悪事」は家老・年寄が諫言しないからと断じ、そのような「人」がいけない、つまりは今まで見てきたような自覚と資質を備えた「奉公人」がいけないものである。

とはいえ、その家老に常朝は就いていない。常朝の父重澄の実家中野家を念頭におけば、佐賀藩の加判家老や支藩小城藩の家老に就任した者もあり、「下より登り大功を遂、御用に立たる人、御代々数人有之」（二の一五）との

認識からすれば、少なくとも常朝自らも家老の役につけるとの思い・期待があつたと考えられる。しかし、就かないまま光茂は死亡、常朝は出家する（元禄一三年）。結局「人より押下げらるる」「小身者」に終わってしまったわけで、これを「無念」（二の一四一）とする一種の挫折感を彼が有していたと想定するのは、あまり無理なことではないだろう。彼は、養子・吉三郎へそのような思いも伝え、家老への志も期待したのかもしれない。

また常朝が基本的に側役であつたことも葛藤の要素であつたと想定される。父・重澄の兄中野茂利の言としてこのように記される。茂利は、勝茂の年寄役を勤めていたが、「御手元の役儀をしては大働はならずと存立、ふつと出仕不仕候」と出仕をやめた。その後、召し出しの話があつても出仕せず牢人した。子の政（正）利も年寄役を命じられ、別に五百石が拝領されたが、茂利は「御膝元の奉公などして、能奉公と思ふか、夫では大仕事はならず」といった（八の一五）。常朝は結局、側役であり、「大仕事」はできなかったことになる。他方で、側役と外様役について、「御側」の者は差し出がましいことはせずに「自然」と御用に立たなければいけないが、「外様」の奉公はそれでは追いつかず、遺漏なく心掛け、上の者の目につくような心持ちが必要とした（二の六三二）。立身に関しては側役は自然体がよいが、外様役は相応の努力も必要だが、立身の可能性は外様役にあるとみていたのではないだろうか。

側役では大きな仕事をするための立身は困難、との常朝の思いが窺える。このようにみれば、次の話題は興味深い。それは彼の著作とみられる『御代々御咄聞書』に載る常朝が仕えた鍋島光茂に関する話である。つまり光茂は「第一拔群御理発二而御短慮二被成御座候、夫を出儘二御はたらき被成候ハ、物あらく御手打などあぶなく候、儒道・仏道など御心をよせられさる事二候へハ、右を押へ申たより」がない。しかし光茂は歌が好きで、「御利発・御短気を歌がやらけ申候ゆへ、終に御粗忽成ル御振廻無御座、次第に御慈悲心御家中下々迄行渡り申候、然ハ公ノ御歌学ハ御国家繁昌之根本」と、相良求馬（佐賀藩家臣）が語つたという⁽³⁰⁾。光茂への常朝の複雑な眼差しは別

に論じたが、ここでは、光茂の短気な性格を和歌が和らげるため、光茂の歌学は国家（佐賀藩）に利するものである。この光茂への歌学につき、西三條実教よりの古今伝授に使者として京都で奔走することを常朝は自ら記している。⁽³²⁾小身者の「側役」ではあるものの、主君の人格を補う歌学の面で「御国家繁昌ノ根本」を作ったという、やや屈折した思いをみてとれよう。「奉公人」としての常朝は「芸は身を助る」といふは、他方の土のこと也、御当家の士は、芸は身を亡す也」（一の八八）と「芸能」に距離をおこうとしているが、奉公の至極として家老就任が果たされないなか、芸能での国家・主君への奉公という認識を持つことになったのである。これも葛藤・挫折の思いと裏腹の関係にあるのではないか。

側役の小身者に終始した常朝は家老に就くことはなかった。彼自身、吉三郎に対し、

立身ノ仕様、年若キ内ニ俄出頭なといたし候てハ落度有之物なれハ、四十ノ内ハ成程引取居候而、四十已後段々立身をして本意を可遂と存候つる、去共四十二歳ニ而、乗輪院（鍋島光茂）様御逝去被遊候ニ付、一途ニ御供と観念いたし出家遁世いたし候（集八五五）

これからという時に（つまり早い立身ではなく、機が熟した立身）、光茂が亡くなったというが、「本意」である家老に就かなかつたのは事実である。吉三郎へのかかる常朝の主張は、弁解ないし葛藤・挫折感の別言、とするのは曲解に過ぎようか。

いずれにしても、自らは就けなかつた家老層への常朝の批判、失望は明らかだろう。常朝が家老を奉公の至極とするのは、そしてそれへの立身を思うのは、地位が高いからではない。むしろ、一番乗などで命を捨てるよりも、主君の心入れを直し「御国家」を固めるのが奉公であり、諸人の支持や主君に受け入れられ、年寄・家老にならなければ諫められないからである。これは「私欲」の奉公と違う。そうでなければ忠臣とはいえないという考えがあったからである（一一の二八）。泰平な時代、合戦で命を落とすという恐れはなくなっており、主君を諫め国家（藩

政)を安定させるのが奉公であり、それは決して「私欲」からではない。しかし、小身者が家老へ立身し奉公すると志すには、相応の心的なエネルギーがなければならぬだろう。自らを「日本一」という「高慢」・自負心もそのような心的エネルギーの要素であろう。常朝はそのような意味で欲心それ自体を否定しない。大役に就く望み・欲がないのは、失敗を恐れる臆病者であり、受け容れられない、という常朝の考え方は先述した(集八五七)。

それでは、かかる欲心、心的エネルギーをどのように考えているのであろうか。吉三郎にこのように述べている。

我等若年ノ砌、常治居士(山本五郎左衛門常治)物語ニ名利を思ふ奉公人ハ奉公人ニあらず、名利を思ハぬ奉公人ハ奉公人ニあらずと昔よりならハし候、面白事之由被申候、若輩心ニひしと疑おこり、不安置工夫申候而存当り候ハ、名利を思ふ奉公人ニあらずと申ハ素より知れたる事ニ候、名ノ為利ノ為かへ物ニ奉公するハ私欲ノ商奉公なれハ也、名利を思ハぬ奉公人ハ奉公人ニあらずと申ハ、抑忠節之肝要ハ君ニ諫を申事ニ候、奉公を仕るからハ肝要ノ忠節を尽さてハ甲斐もなし、さらハ諫を可申と思ひても其位ニいたらねハ諫ル事ならず、然ハ家老ノ座二なをりて諫る外なし、小身より家老職ニ成事、能々諸人ニ誉られ知行大分申請ねハならず、然時ハ名利を思ふニ似たれとも全ク私欲ニあらず、君ノ為ニ名を取君ノ為ニ利を取へしと思ひ定ムへき事也、此意地なくしてハ大分ノ御用ニ立事ハ成間敷事也、爰を以名利を思ハぬ奉公人ハ奉公人ニあらずと云成へし、得と胸ニ落たり、此儀成間敷事ニ而無之、小身より家老座席ニ成たる衆目前ニ有之事候(集八五四〜五)

常朝の長兄武弘の子で寛永一六年生の常治は、常朝の甥とはいえ、彼より二〇歳年長で、ある時期常朝は、「毎夜、五郎左衛門咄を承りに参り候」(二の二四一)とかなり影響を受けたと思われる。その常治は、「名利」を思つても奉公人ではなく、「名利」を思わなくても奉公人ではないという昔からの習わしを常朝に話してくれた。常朝は前者については「私欲ノ商奉公」で自分の「名利」という。これに対し、後者については、「忠節」の肝要は主君への諫言であり、それが可能な地位が家老であるため、「小身より家老職ニ成」という「意地」で、これは「私欲」

ではなく、主君のための「名」と「利」を目指す「名利」とした。

このようにいわば〈私の名利〉と〈奉公名利〉という二つの名利を想定し、後者を近世武士・「奉公人」の「立身」のための心的エネルギーの根源と考えたのである。それは欲心の合理化でもあろう。この吉三郎への教えの内容は、同趣旨で『葉隠』の巻二の最終条目（二の一四一）にも載るのは注目しておきたい。先述したように（一節参照）、『葉隠』の内容は巻二までとそれ以降では内容が二分され、巻一・二は常朝が陣基に一夜で語った教訓とされている。『葉隠』の主要なテーマが奉公人の心組みだとすれば、その至極としての家老への立身の心的エネルギー、動機付けとしての〈奉公名利〉はいわば、私欲に基づく〈私の名利〉とは別の、もう一つの「名利」なのである。

おわりに

『葉隠』の成立の背景は判然としない。しかし瞥見してきたように、その構成を勘案すれば、巻二の最終条目（二の一四一）および『葉隠』自体の最終条目（二の一六八）が、前者は家老への〈奉公名利〉での立身、後者がその家老への批判、で締めくくられているのは留意してよいだろう。巻三・一は佐賀藩の歴史（「国学」）の内容であるが、このうち「御国之諸士褒貶」（巻七・九）と家臣に関する内容が多くを占めるのは、「奉公人」のあり方を主題の柱とする『葉隠』であることを勘案すれば、故なしとしない。常朝の養子・吉三郎に与えた『愚見集』とともに、『葉隠』は「奉公人」としての家臣（就中、家老層）の現実と自らの履歴に葛藤を覚える常朝、それに共感する陣基による、奉公人の心組みの書である。しかしその葛藤は、主君や家老など現実への批判、失望に対するものでもあり、『葉隠』そのものは写本により「世上の批判、諸士の邪正、推量、風俗等にて、只自分の後学に覚え居られ候を、嘶の俣に書き付け候へば、他見の末にては意根悪事にもなるべく候間、堅く火中仕るべき由、返

すがえす御申し候⁽³³⁾とあるのから窺えるように、いわば秘書扱いとされたのであろう。

しかし、家老に就ける程の力量を自負しつつも小身者に終わった常朝の思いは、『葉隠』完成⁽³⁴⁾後も萎むことはなかった。正徳四年、鍋島宗茂（後の五代佐賀藩主）に対し常朝はいわば上奏文を差し出している。そのなかでは、

人を能御目利被遊器量ノ者ニ御知行を大分被下候ハ、御用ニ立候者共出来可申候、小身ニ而ハはたらけ不申候、惣而人之出来申根本ハ御知行を被下ニ極り申候、是亦御相談之上之儀ニ可被遊御事候、御前之御意ニ入候ても、御家中諸人不合点ノ者ハ出頭遂不申候、世智かしこく気力つよき者ハ、御主人様ノ御心を量り、御数寄之道なとより御氣ニ入、能き者ニ似セ申儀、間々御座候、御了簡可被遊御事候、畢竟御氣ニ入候事計を申上、ほめ上申者ハ、必私欲ノ者と被 思召、又御立腹被遊儀ニ而も、御異見を申上者か能者と被 思召候ハ、
御座有間敷様奉存候⁽³⁵⁾

家臣の器量の見極め、諸人の支持がある者の取り立て、小身者の立身、諫言の受け容れ、智恵を働かせ取り入る褒め上げ者の私欲など、家臣との関係をめぐり主君が留意すべきことが述べられている。これまでみてきた「奉公人」の心組みの主君側に即した内容といえるが、「立身」が奉公人のみならず主君にとっても大事であったという、常朝の認識を窺うことができる。

いずれにしても『葉隠』は、自分の弱み（非）を自覚しつつ武篇者の自負心（高慢）を持ち、家老として主君に諫言するための「立身」への思いをめぐる、小身者・山本常朝の「奉公人」としての様々な葛藤の合理化、その所産としての性格を持つのである。

注

- (1) 幕府の旗本・御家人関係では、荒川秀俊「御家人の出世コースと派閥——久須美六郎左衛門と中野又兵衛（研究余録）——」（『日本歴史』三二二、一九七四年）、西沢淳男「江戸幕府代官の昇進・移動に関する一考察」（『法政大学大学院紀要』二三、一九八九年）、小川恭一「徳川幕府の昇進制度」岩田書院、二〇〇六年、山本博文『旗本たちの昇進競争』角川学芸出版、二〇〇七年、同「武士はこうして昇進した」（『諸君』二七の一、一九九五年）、橋本昭彦「講演 武士の出世と学校生活——昌平坂学問所日記を読む——」（『斯文』一一四、二〇〇六年）、また大名関係では谷口克広「特集研究 織田家中 出世競争と前田利家」（『歴史読本』七四八、二〇〇二年）、松平（上野）秀治「仙台伊達氏の官位昇進運動について（上）（下）」（『史料』一五〇一七、一九七九年）、野田浩子「井伊直幸と松平容頌の官位昇進競争」（彦根藩資料調査委員会編『譜代大名井伊家の儀礼』彦根城博物館、二〇〇四年）、橋本政宣「松平定信の官位昇進運動」（『日本歴史』六〇〇、一九九八年）、堀新「近世大名の上昇願望」（堀新・深谷克己共編『江戸』のひと身分3 権威と上昇願望 吉川弘文館、二〇一〇年）など、漸次 蓄積される段階にあるが、本稿で対象にする近世期武士階層で多くを占める大名家臣の昇進・立身に関しては、坪内良博「武士のライフコース——徳山藩藩士家譜の分析を手がかりに——」（『甲南女子大学研究紀要 人間科学編』四〇、二〇〇四年）、中村彰彦『会津武士道——侍たちは何のために生きたのか——』PHP研究所、二〇〇七年、舟沢茂樹「福井藩家臣団と藩士の昇進」（『福井県地域史研究』一、一九七〇年）、村下洋介「徳島藩における立身・御加増・嫡子召出——洲本家臣団の事例」（『地方史研究』二五九、一九九六年）など、直接に主題とする論考は多くはない。
- (2) 池上英子「名譽と順応」NTT出版、二〇〇〇年、谷口眞子「近世社会と法規範」吉川弘文館、二〇〇五年など。
- (3) 石井紫郎「近世の武家と武士」（同『日本人の国家生活』東京大学出版会、一九八六年所収。初出は一九七四年）。
- (4) 園田英弘、濱名篤、廣田照幸「士族の歴史社会学的研究」名古屋大学出版会、一九九五年、竹内洋「立身出世主義——近代日本のロマンと欲望——」日本放送出版協会、一九九七年、廣田照幸「陸軍将校の教育社会史 立身出世と天皇制」世織書房、一九九七年など。
- (5) 拙稿「武士の昇進」（堀・深谷前掲共編著所収）、同「貝原益軒の『武』認識とその行方——〈武功譜代〉像の形成をもう一つの「名利」

めぐつて——」〔『比較社会文化』一五、二〇〇九年〕。

(6) 万治二・享保四年。山本常朝に関しては自身が著した『山本神右衛門常朝年譜』（『佐賀県近世史料』第八編第一巻）参照。幼名の松亀から不携、市十郎、権之丞、そして通名の神右衛門などに改名するが、本稿では一般的な常朝に一表記する。なお正確には元禄一三年の佐賀藩鍋島家二代藩主光茂の死去後に、四二歳で養子に家督を譲り出家していた。

(7) とくに日中戦争・太平洋戦争の時期の出版が目立つのは、歴史性を背景とした『葉隠』の読まれ方として留意しておく必要がある。内田鉄洲『葉隠の精神・日本の将来に断案を下す』指南社、一九三七年、大井虔堂『信念の書葉隠読本』現代社書店、一九三七年、濱野素次郎『葉隠精神と教育』丹丘社、一九三八年、松波治郎『葉隠武士道』一路書苑、一九三九年、橋本実『葉隠研究』平凡社、一九四〇年、立花俊道『葉隠武士道と禅』三省堂、一九四〇年、川上清吉『葉隠の哲人山本常朝』霞ヶ関書房、一九四二年、山上曹源『葉隠武士道と精神』三友社、一九四二年、中村常一郎『葉隠武士道精義』拓南社、一九四二年、大木陽堂『葉隠修養訓』教材社、一九四三年、松波治郎『水戸学と葉隠』創造社、一九四四年など。

(8) 『葉隠』を専論した主なものに、栗原荒野『葉隠の心』金華堂、一九六六年、古川哲史『葉隠の世界』思文閣出版、一九九三年、松田修『葉隠序説』（『国語国文』三六の一、一九六三年、相良亨『葉隠』の世界）（相良亨他校注『三河物語 葉隠』岩波書店、一九七四年、本郷隆盛『理外の道——山本常朝——徳川思想における生の諸様式——』『思想』七七二、一九八八年、小池喜明『葉隠』の叡智』講談社、一九九三年、山本博文『葉隠』の武士道』P H P 研究所、二〇〇一年など。なお、相良亨他校注前掲『三河物語 葉隠』のほか、和辻哲郎・古川哲史校訂『葉隠』上・中・下、岩波書店、一九四〇～一年、城島正祥校注『葉隠』人物往来社、一九六八年、奈良本辰也責任編集『葉隠』中央公論社、一九六九年、など数種の翻刻本のなかには、的確で整理された解説文が掲載される。また、『葉隠研究』誌には『葉隠』の史料研究として基礎的で優れた論考も収載する。

(9) 『日峯様御咄之書（茂宅聞書）』、『直茂公御咄聞書』〔御當家聞書（草野太郎兵衛永元聞書）』〔加州様御咄九ヶ條信州様御聞書』〔竹田聞書』など。いずれも『佐賀県近世史料』第八編 第二・三編所収。

(10) 卷三の冒頭。本稿の使用テキストは相良他校注前掲『三河物語 葉隠』。なお本テキストが底本とする写本表現は、

「聞書」「第三」などであるが、本稿では便宜上、巻一、巻三のように表記する。また『葉隠』をはじめ本稿での引用史料はテキスト表記にしたがうが、底本の異本による修正などを適宜行なっている。

- (11) なお、高野も関わる『佐賀県近世史料』第八編第一・三巻には、『葉隠』関連史料の一部として「聞書」類や常朝に影響を与えた人物の著作物を収載しており、解題とともに参照されたい。

- (12) 延宝六年（寛延元年。佐賀藩鍋島家家臣。彼は元禄九年、一九歳で祐筆役に就くが、宝永六年、三二歳の時に側役を罷免、翌年に常朝のもとを訪れ『葉隠』編纂に携わったという。享保一六年、五四歳で祐筆役に再度就任するまでは遠慮の身であった（『田代又左衛門陣基略伝』『葉隠聞書校補』首巻。『佐賀県近世史料』第八編第一巻所収）。

- (13) なお、佐賀藩ではいわば官撰の藩主年譜類のほか、室町・戦国期の肥前を中心に九州全域を対象とする歴史書が鍋島家の意向との関係は判然としないが、『歴代鎮西志』（元禄年間、鍋島家家臣犬塚六郎兵衛盛純）・『歴代鎮西要略』（『歴代鎮西志』の簡略本とされる）・『北肥戦誌』（九州治乱記）とも、享保五年序文、鍋島家家臣馬渡俊継が編纂）など数種が作成されており、特徴的であろう。対象が九州域である点は、大宰少式を世襲し鎮西奉行とも呼ばれた少武氏の影響下に肥前があったことから、『大宰管内誌』（天保一二年成立。福岡藩神職伊藤常足編纂）に通じるものがあるかもしれないし、犬塚氏が征西大將軍懷良親王に供奉し九州へきた宇都宮氏の子孫という系譜認識など、個別事情も考えられる。これらの歴史書類と、鍋島家の意向を必ずしも反映しない「聞書」類やその集成的な内容に相当する『葉隠』（他家の歴史叙述も含む）などの成立の背景の異同も検討する必要があるう。

- (14) 以下、本稿では巻二の一四〇条目を「二の一四〇」のように表記する。なお、写本によっては「夜陰の閑談」とされる序文部分は、使用テキストの頁数と合わせ「序文二二六頁」のように記す。

- (15) 『佐賀県近世史料』第八巻一卷所収。「奉公根本」「奉公枝葉」「可慎」の三つの柱からなる。

- (16) 『愚見集』に書付候ごとく（二の一四〇）、「此事、『愚見』に書附候通也」（二の一四二）。山本吉三郎は通名の権之丞や常俊を名乗るが本稿では吉三郎と称する。『愚見集』作成の宝永五年は、常朝が隠棲して八年目の五〇歳、吉三郎は養子に入って六年目の三二歳である。

- (17) 小池喜明氏はこの点に注目し、『葉隠』は、「個人の名誉に傾斜した名と恥の『武士道』」ではなく「組織への貢献を主眼とする忠の『奉公人』道」とされる（小池前掲『葉隠』の叢書）三五頁）。卓見と考えるが、常朝の場合、自ら

もう一つの「名利」

が父七〇才の子供故に商人へ養子に出されそうになり、また虚弱で成長できないと云われたことなどから、むしろ武士本来の戦闘者としての自覚を有した「武篇者」「曲者」を理想像の要素としており、泰平の世に主君・組織へ忠を尽くす武士のイメージとはいささか異なると考える。「奉公人」は「武篇者」「曲者」という性格も併有しており、単なる役人・臣下ではない。

(18) なお、巻一〇は「他家の噂并由緒等」、巻一一は全体の補足。

(19) いわゆる鍋島猫化騒動などと称される説話・文芸は竜造寺に対する鍋島のうしろめたさが、いくつかの契機を経て物語化したものといえよう。以上のような点に関しては拙稿「鍋島猫騒動——御家騒動の物語化と怪異性」(福田千鶴編『新選 御家騒動 下』新人物往来社、二〇〇七年) 参照。

(20) かかる点をめぐり、詳細は拙稿「『葉隠』思想の形成と構造」(拙著『近世大名家臣団と領主制』吉川弘文館、一九九七年所収)、拙稿「鍋島光茂像の側面——『葉隠』にみる批判的眼差しをめぐって——」(『葉隠研究』四三、二〇〇一年) 参照。

(21) 『愚見集』八五三頁。以下本文に「集八五三」のように注記。

(22) 一門で切腹した者は山本常治・沢辺平左衛門・中野正包の三人。背景や常朝の認識などの詳細は拙稿前掲「『葉隠』思想の形成と構造」参照。

(24) 『山本神右衛門常朝年譜』。本年譜の攷筆は享保四年九月二六日で、常朝は翌一〇月一日に六一歳で没する。なお、年譜内容を子細にみれば、その内容形式は、鍋島光茂の死去と自分の出家および養子をとる元禄一三、四年頃まで、『葉隠』完成時と目される享保元年まで、それと攷筆時の享保四年までの三段階に分かれ、内容はこの段階順に簡便になり、第二段階は光茂七回忌(宝永三年)などをのぞけば年表形式となり、第三段階は年表形式がさらに簡略になる。これに比べ第一段階の出仕時期は内容も豊富で、出仕時期故に加増、拝領記事が見られるのは当然ともいえるが、藩主からの褒美の言葉など褒賞を含めた記事内容は立身への思いの反映とも解されよう。

(25) 寛永六年、元禄六年。鍋島家家臣。儒学・仏教に通じた。竜造寺隆信の漢文体年譜記録『泰巖公御年譜』、鍋島直茂の遺訓の注釈書『喬木真宝』など数種の著作があるが、なかでも一冊の中核的な思想が展開される『要鑑抄』は、「一、武士道ニ於テ未練ヲ不可取、一、先祖ノ名字ヲ断絶スヘカラス、一、畢竟主君之御用ニ可立」の三誓願を記し、

『葉隠』の四誓願、とくに「一、武士道に於ておくれ取り申すまじき事、一、主君の御用に立つべき事、一、親に孝行仕るべき事」に影響を与えたとされる。なお、『佐賀県近世史料』第八編三卷に石田一鼎関係の基本史料を収載する。

- (26) このようなことに關しては、三谷千左衛門（本来は勝茂の歩行十人衆）が「段々御取立被成」つまり立身したが、常々「人は氣持が大事也、重病にて相果候時も、今日死ては成ぬ事有間、二、三日生て可居と思ふたら、氣を引立て、三日ばかりの命は慥に生延べしと覚候」と物語ったという記事がある（八の三二）。立身には「体」（身体）に勝る強い「氣」（氣持ち）が必要との考え方がやはり示される。

- (27) その背景は竜造寺氏から鍋島氏へ領主が交代して佐賀藩が成立したという歴史意識が、鍋島家の「御譜代」意識を醸成したのではないかと考えている（拙稿前掲「『葉隠』思想の形成と構造」）。

- (28) 重澄の兄茂利の子・正利と孫・利明は佐賀藩加判家老、重澄の弟貞政は小城藩家老。

- (29) 御傍小姓・小小姓・御傍役・御傍小姓役・御書物役・京都御用・供使・間次番・書写奉行等。ただし、天和元年、二三歳の時に「今年春夏外様不寝番相勤」とある（『山本神右衛門常朝年譜』七七四頁）。

- (30) 『御代々御咄聞書』（『佐賀県近世史料』第八編第一卷所収）八四二―三頁。

- (31) 拙稿前掲「鍋島光茂像の一側面」。

- (32) 『山本神右衛門常朝年譜』七九八―八〇八頁。元禄九―一三年。但し京都役については同五年からみられ、この時期頃から西三條家との交渉の可能性もあろう。

- (33) 写本により、序文（「夜陰の閑談」）の冒頭部分。本稿で用いたテキストには底本未裁で収録されないが、本文引用は和辻・古川前掲校訂『葉隠』一六頁に拠った。

- (34) 同書の編纂は常朝と陣基が出会った宝永七年からと考えられる。完成時期は判然としないが、一部写本では享保元年とする。

- (35) 「乍恐書置之覚」（『佐賀県近世資料』第八編第一卷所収）九一五頁。

〈付記〉

本稿は科学研究費補助金基盤研究(C)「近世日本における政治意識と福祉観念の相関性に関する基礎的研究」(研究代表者・高野信治)(二〇一〇～二〇一三年度)による成果の一部である。